

くものいと

第10号
29-1-1992
関西クモ研究会

深泥池のミズグモ — その後

加 村 隆 英

京都市の深泥池では過去に2回、ミズグモが採集されている（八木沼，1977，1980；八木沼他，1981）。私は学生の頃、かなり頻繁に深泥池に通っていたが、私自身はミズグモを採集したことはない……と思っていた。ところが、実は、私の学生時代（1982年）の採集品のなかにミズグモがあったのである。

当時、私は深泥池の湿原でピットフォールトラップによる採集を行っていたが、ワシグモ科以外のものは、その後詳しく検討することもなく、戸棚の奥にしまいこんでいたのであった。最近、それらの古い標本を整理していたところ、なんとミズグモが出てきたのである。その標本は腹部がつぶれていたが、雌の成体であり、外雌器が残っていたので、種を確認することができた。これはミズゴケの間または、落葉層に埋め込んだトラップに入っていたものであるので、ミズグモといえども常に水中にいるわけではなく、当然のことだが、時には地上を歩き回るらしいということはわかった。

まあそれにしても、この標本は一度は見ているはずなのに、ミズグモと気づかぬまま、9年もたっていたという、まったくお粗末で、お恥ずかしい話。

ともかく、深泥池におけるミズグモの3回目の採集記録として報告しておく。
採集データ：1♀，25-V~9-VI-1982（加村隆英採）。

私がこのように、自分の標本中にミズグモを”発見”して、まもなく、みんなでもう一度、深泥池にミズグモを探しに行こうという話になった。幸い、立命館大学の吉田真先生を通じて、京都市深泥池学術調査団の協力も受けられることになり、参加者を募ったところ、1991年9月23日に10名が集まった。ミズグモは浮島のふちの水中にいるかもしれないが、また、浮島内のミズゴケのなかに潜んでいる可能性もあるので、6名はボートで、4名は浮島内を歩いて調査した。しかしながら、結局ミズグモは我々の前に姿を現さなかった。そう簡単には見つ

からないだろうとは思っていたものの、ひよつとしたら、という期待ももちろんあったので、やっぱり残念。

また、この日は、深泥池の東隣にある宝ヶ池の近辺で、ある人がミズグモらしいクモを見たことがあるという、はなはだ不明瞭な情報ももたらされていた。宝ヶ池というのは、貸しボートもあり、周辺はきれいな公園になっており、休日ともなれば、家族連れやアベックでいっぱいになるところである。「あんなところにミズグモは、いてへんやろ」とは思ったものの、せつかく10人集まったのだから、行くだけ行ってみようということになったが、やはりダメ。一か所は水面に油が浮いた小さな池で話にもならず、もう一か所は水が干上がって、ザリガニばかりがたくさんいた。

結局、この日は最後に修学院の飲み屋で残念会をやって、おひらきとなった。

さて、この日、久しぶりに深泥池を訪れてみて、池のようすが以前（1982～1985年）とはかなり変わっていることが印象的であった。ヒシが驚くほど繁茂して、水面のほとんどを覆っていたし、一方、かつて在来の植物に悪影響を及ぼすとして、目の仇にされていたナガバオモダカがどういうわけかほとんど姿を消し、ジュンサイやタヌキモはかなり増えていた。年をおって、たしかに池のようすは変化している。

ところで、ミズグモにとって、この池は住みにくくなっているのだろうか。1930年の最初の発見から半世紀たったあとも、まだ生き続けていたけれども、これからはどうであろうか。もしも、今後、周辺の道路の拡張工事が行われたりすれば、この池は確実に荒廃していくであろう。池の内外の環境の保全対策が講じられて、これからも深泥池はミズグモのいる池として、存続してほしいものである。

なお、当日の参加者は次のとおりです（50音順、敬称略）。

伊藤千都子、金野晋、加村隆英、西条雄介、田中穂積、西川喜朗、平松毅久、細田みどり、牧野達也、吉田真。

—文献—

八木沼健夫, 1977. ミズグモは生きていた. *Atypus*, (69): 38.

-----, 1980. ミズグモの吉沢覚文氏と深泥池 —ミズグモ最初の発見の記録—. *Atypus*, (77): 9-14, pl. 1.

-----・吉田真・加村隆英, 1981. 深泥池とその周辺の真正クモ類. 深泥池の自然と人(深泥池学術調査報告書), pp. 238-244. 京都市.

最近の話題から — コモリグモ —

田中 穂積

今回の関西支部での自己紹介では、私用のため、何も最近の話題について話す時間もなく、先に失礼しました。それで、この場を借りて、私の最近の話題について、二、三書いてみたいと思います。

1。 *Pardosa isago* Tanaka, 1977 は *P. lyrifera* Schenkel, 1936 のシノニムか
虞と宋 (1988) は、私が新種として記載した *P. isago* を中国産の *P. lyrifera* のシノニムとして扱っている。その後、八木沼健夫先生を通じて、中国産 *P. lyrifera* の雌の標本を検討する機会を得たが、そのまま保留にしていた。現在、改めて、中国産の標本を宋博士に依頼しているところであり、標本が届き次第、結論を出したいと考えています。

2。 *Pardosa okinawensis* Tanaka, 1985 は *P. venatrix* Lucas, 1846 のシノニムか
虞と宋 (1988) は、前種と合わせて、*P. okinawensis* を旧北区に広く分布する *P. venatrix* のシノニムとして記述している。気になりながら、そのままにしていたのだが、やっと、最近、ずっと前に一度訪れたことのある、ドイツのフランクフルトのゼンケンベルグ博物館より、ネパールの標本 (♂ は成体、♀ は亜成体) を借り、現在検討中である。

また、本種については、別の問題も含んでいます。私が *P. okinawensis* を新種として記載したのが1985年ですが、同年に、ソ連のZyuzin博士が、今問題にしている *P. venatrix* をタイプ種とし、*Wadicosa* 属を新属として発表しました。この属の名は、Platnick (1989) によって出版されたクモのカタログの中でも採用されています。従って、この件についても、結論を出すためロシア語を必至に訳していますので、もうしばらく待って下さい。

3. 八木沼健夫先生の紹介で、ドイツのNentwig 博士から、インドネシアの Krakatou 島で採集されたコモリグモの標本の同定を依頼され、目下検討中です。現在のところ、Arctosa 属1種、Lycosa属1種、Trochosa属2種、Pardosa 属1種が採集されています。そのうち、Nentwig 博士より報告がなされると思います。

以上、コモリグモ科の最近手がけている問題について述べてみました。結果については、論文で発表したいと考えています。

参考文献

Platnick, N. I., 1989. *Advances in Spider Taxonomy 1981-1987*. Manchester Univ. Press.

田中穂積, 1977. 日本産オオアシコモリグモ属2新種の記載. *Acta arachnol.*, 27(Special no.):51-59.

Tanaka, H., 1985. Descriptions of new species of the Lycosidae (Araneae) from Japan. *Acta arachnol.*, 33:51-87.

虞 & 宋, 1988. 中国狼蜘蛛科(蜘蛛目) 种类的修订.
動物学集刊, 6(3):113-121.

Zyuzin, A. A., 1985. Generic and subfamilial criteria in the systematics of the spider family Lycosidae (Aranei), with the description of a new genus and two new subfamilies.

Proc. Zool. Inst. USSR, Acad. Sci., Ovtsharenko, V. I., ed., 139:40-51.

関西クモ研究会ゼミ

日時：1991年11月16日（土）

場所：追手門学院大学視聴覚教室（N o 4 4 4）

講演：

吉田 真－円網を張るクモ数種の網の特性と捕食戦略

八木沼健夫－クモの科の諸問題（最近変更された科、問題のある科について）

清水裕行－コンピュータによるクモの文献・リストの整理・登録の実演

供覧・展示・紹介：

* 釧路湿原のミズグモの飼育

* タイのタランチュラ（たぶん Chylobracys ?）の標本

* 中国のクモの図鑑・モノグラフ多数

* 土壌動物検索図説

* National Geographic, 180(3), 1991 （ハエトリグモの特集号）

V T R鑑賞：

クモに関する多数の番組をダビングし編集したもの（八木沼先生保管：N o . 4）

寄贈：

福本伸男氏よりクモの書物多数を本会に寄贈。

東條清氏より「和歌山クモの会会報N o . 1」を配布。

西川喜朗氏より「多賀町（滋賀県）の洞窟動物」の別刷配布。

八木沼健夫氏より「シノビグモ新属」「ハウシグモ雑記」の別刷配布。

各自の近況報告

出席者（敬称略）

福本伸男、細田みどり、井上晶子、西川喜朗、加村隆英、金野晋、清水裕行、田中穂積、東條清、八木沼健夫、吉田真。

シノビグモ属その後

八木沼健夫

長い年月を経て、やっとシノビグモをキシダグモ科 Pisauridae の Rhoicini-nae の新属として Sinobius を創設した (Acta arachnol. 40(1). 1991)。亜科としてはいまのところ反論なく Rhoicininae でよさそうだが、科についてはなお問題が残る。

本属発表後、アメリカの Platnick博士から「Rhoicininae に置いたのは正しいと思う」との通知があったが、Rhoicininae の所属を彼は Coelotes を含めたガケジグモ科 Amaurobiidae として扱っている。

オーストラリアの Mckay博士から「興味のある種なので、標本を見たい」との希望があり、♂♀の標本を貸してある。彼はコモリグモ科 Lycosidae の権威で、関連のあるクモなので比較検討したいらしい。いずれそのうちに彼の意見が聞けると思う。

アメリカのキシダグモ科の専門家 Carico博士からは「Rhoicininae の所属科にいろいろ問題があり、Sierwald博士や Griswold博士らは Trechalea を含む Trechaleidaeに置いているが、自分はその意見には反対で、いまのところ確信はないが、Rhoicininae だけで独立科とするのがよいのではないかと考えている」との所感をもらった。

属は落ちついても、なお科に問題があり、今後どうなることやら。自らも研究を進めるつもりであるが、情報の入り次第何かに紹介しようと思う。

ブンルイとはむずかしい仕事だと痛感する。

(8-XII-1991)

本会への来訪者

1991年9月1日：

大会終了の翌日に入江照雄氏・斉藤博氏が来阪、八木沼宅を訪問（10:00～15:30）。入江氏は現在ユウレイグモ科を研究中、なおマシラグモ・ナミハグモにも手を伸ばしたい由。

引き続いて南宮煥氏・西川喜朗氏・加村隆英氏・田中穂積氏が来訪（16:00～21:30）。南宮氏は午前中、本部のある追手門学院大学と西川喜朗氏宅を訪問された。韓国のクモ類の原色図鑑出版を計画中とのこと。おもなスライドを見せていただく。

南宮氏とは30年来のつきあいであるが、お会いしたのは初めて。日本語は日本人よりうまい。八木沼に会った感想を「本居宣長が加茂馬淵をたずねて教えを受けた松阪の一夜」にたとえられたのには驚き。

10月4日：

中部クモ談話会から須賀瑛文・清水善夫・緒方清人の諸氏が来訪。長年会の世話を下された清水善夫氏にかわって須賀瑛文氏が緒方清人氏とともに会の運営に努力される由。

「名古屋も大いにがんばって下さい」というと、大阪こそもっと発展してほしい。学会の本部のあるところだし、何人もの専門家がおられるのだから」と逆に釘をさされた。

和歌山クモの会創立

米田宏氏を会長として、東條清氏・青木敏郎氏らはその世話役として「和歌山クモの会」を創設された。

同じ関西の中に三重クモ談話会と和歌山クモの会を持つことになる。嬉しいことであるが、それだけに関西クモ研究会の存在に責任を感じる。

近 況 報 告

東條 清

久しぶりに先生方のお元気な姿に接し、有意義なお話や標本を見せていただき本当にうれしく、また今後の私の取り組みの上でたいへん参考になりました。

さて、そのときの近況報告として、①公立高校を退職して3年余り、現在私立幼稚園の自然クラブの講師として先生方の指導と子供の指導にあっていること。また、県立高校の生物の講師としても勤務していること、②幼稚園では遊びのなかでクモを題材として、楽しくやっていること、③昨年(1990年)和歌山のクモ研究の仲間たちと「和歌山クモの会」を結成したことなどを申し上げました。

追記

なおその際、時間をあまりとってはと思い省略したのですが、私が現在取り組んでいることは、和歌山県内のクモ目録の作成です。

和歌山のクモについては、すでに大先輩の故湯原清次先生・故植村利夫先生によって発表されていますので、それらを参考にしながら八木沼健夫先生・西川喜朗先生のご指導をいただき、県下各地を調査しています。

こうしたなかで、他府県で確認されているのに和歌山県では未確認であったものも、以下に示すようにいくつか見つけることができました：

キシノウエトタテグモ(1988年)、クマダハナグモ(1989年)、ホシヒメグモモドキ(1991年)、キジロオヒキグモ(1991年)など。

なお八木沼健夫先生から、和歌山にはサラグモ科のクモはあまり見つかっていないが探せばもっとあるはずだというご指導もあり、1992年度はこれに重点をおきさらに調査して参りたいと思っております。

八木沼健夫

退職後3年目になりますが、最近はこれという研究成果はありません。でもクモに関する諸用件をさばくのに追われている日々です。おもなものは次の通り。

1. 夕刊読売(関西版)にクモの記事を1990年6月から1991年4月まで月1回(合計11回)掲載。
2. アメリカの Platnick博士が Atypusその他の日本の古い文献に目を通し、その中のおもなものについて、著者名・論文題目の英訳の依頼をひっきりなしに来る。次のカタログの資料とする由。忙しいありがたいことです。
3. カナダの昆虫学者が日本でトラップやスリーピングでとったクモの標本の同定依頼があり、日本のクモなのでNoとは言えず引き受ける。
4. 日本の翻訳家からアメリカの文学書に現れたクモ umbrella spider とは何かとの問いがあり、吉田真氏・Platnick博士・Riechert博士らの指導を受けた。どうやらアシナガグモらしい。
5. アメリカから、台湾の Hadrotarsus yamius の原記載とこのタイプ標本の所在

地を知りたい旨依頼があった。原記載は大熊千代子氏にコピーしていただいた。標本に関して国立台湾大学に問い合わせたが、現在残っているとの返事。

6. アメリカ・ソ連・中国から文献コピーや標本送付の依頼が次々とある。
7. その他、新聞社・放送局・出版社から書評原稿依頼や質問・取材などたえまなし。
8. 週1日、追手門学院大学の大学院へ講義に出かける。もとの研究室（現在は加村研究室）を訪ねて、西川氏や加村氏とクモの話をするのが楽しみ。この講義も1月で終わる。そのあとは普通の町のオッサンになる。

金野 晋

本来は多足類の勉強をするといっていました。現在は昆虫ばかりやっています。クモも多足類も、まったくやっていません。8月末で会社をやめまして、北海道をはじめあちこちに採集に行っています。いまは、昆虫の同定で食べています。

クモはまったくやっていませんといながら、徘徊性のクモを何種か飼っています。ふだんは餌にユスリカをやっているのですが、ユスリカだとおとなしく受け取るクモが、生殺しのイエバエをピンセットで摘んで近づけると、羽音を聞いただけで興奮して飛びついてくる。

これは音に反応しているに違いない、調べるときとおもしろいことがわかるだろうと思いましたが、自分ではやるつもりはありませんので誰か調べてくれないでしょうか。

西川喜朗

大阪文化財センターの依頼による、安威川の記念物調査の一環として、生物調査を担当しています。クモ・昆虫・植物などのご協力をお願いしたいと思います。調査に関する費用は、同センターより出ます。

1989年10月～11月、1990年10月～11月、1991年5月～6月に、いずれも約1カ月間、国立科学博物館の先生らと台湾の高山帯の生物調査に行ってきました。このとき採集したクモ類を現在研究中。なかでも、メガネヤチグモのグループは山塊ごとに少しずつ変異がみられ、非常におもしろい。

中国や韓国でメガネヤチグモのグループに属する種の新種記載があるのもうなづける。結構、地理的分化をおこしているようで、興味深いグループである。なお、日本産のものではほとんど分化はみられない。

また、下謝名氏が1982年に記載されたヤエヤマヤチグモ（沖縄・八重山産）が台湾の高地からも採れている。

ヤスデ類の採集目録を、村上好央先生と共著で書いています。その1つが現在印刷中です。

WANTED!!

滋賀大学の畑守さんというヤングレデイが、クモタケ（冬虫夏草の一種）とトタテグモ類の関係を調べるために、トタテグモ類のの採集地を探しています。ご存知の方は御一報下さい。

クモタケはいままで、キシノウエトタテグモにだけ寄生するものと思われてきました。キムラグモやキノボリトタテグモでの寄生も1例ずつ報告されていますが、再確認はされていません。

キシノウエトタテグモ以外の穴居性のクモにクモタケが本当に寄生しないのかどうかを確かめるために、畑守さんは各種の穴居性のクモを飼育してクモタケの胞子を付けてみようと考えておられるようです。

そこで、キノボリトタテグモ、カネコトタテグモ、ワスレナグモなどの産地を御存知の方は御一報下さい。

連絡先：〒520 滋賀県大津市平津二丁目5-1 滋賀大学教育学部
生物学教室横山研 畑守有紀さん

会費納入のお願い

ここ2、3年、関西クモ研究会会誌「くものいと」の発行が不規則になり、会員の皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。昨年から立て直しをはかり、9号、10号をなんとか1991年度内に発行することができました。

1992年度からは年2回発行するめどがつかまりましたので、会計年度を4月から次の年の3月までということで、1992年度の会費（1000円）の納入をお願いします。振込先は以下の通りです。

郵便振替 大阪7-127257 関西クモ研究会